

野呂有子『『秘密の花園』におけるミルトンの主題—「へそ曲がりのスコットランド女王から「第二のイヴ」へ—』『東京成徳短期大学紀要』第30号(1997)45-54.

『秘密の花園』におけるミルトンの主題 —「へそ曲がりのスコットランド女王」から「第二のイヴ」へ—

野呂有子

はじめに

ジョン・ミルトン(1608-1674)は叙事詩『楽園の喪失』(1667)を執筆し、天地創造、人類の墮落と贖罪の展望を公に問うたが、『楽園の喪失』が英米文学に与えた影響にははかり知れないものがある。手近な所では、T.S. エリオット(1888-1965)のミルトン批判と再評価の二つの論文(1936, 1947)、エリオットへの反駁として書かれた C.S. ルイス(1898-1963)の『『楽園の喪失』序説』(1942年)と、ここに表れた文学理論の延長線上に構築された『ナルニア国年代記』全7巻(1950-1956)が挙げられよう。〔『東京成徳短期大学紀要』第29号(1996年3月)掲載拙論、野呂(金窪)有子、『『ナルニア国年代記』におけるミルトンの主題』を参照されたい。〕

また始原の男女の有り方に焦点を当てれば、T. ハーディ(1840-1928)は『ダーヴァビル家のテス』(1891)において、『楽園の喪失』をパラダイムとし、その中で、文明社会に置かれた新しきイヴの〔ニテス〕の悲劇を追求した。(『ダーヴァビル家のテス』には明らかに『楽園の喪失』の脱構築とみられる箇所が指摘されるが、詳細はまた別の機会に譲ることとする。)ハーディの「正統なる後継者」として自らを意識していた感のある D.H. ロレンス(1885-1930)は著作の中で繰り返し、現代におけるくあるべき姿としてのアダムとイヴを追求しているように思われる。

メアリ・ウルストンクラフト(1759-1797)とメアリ・シェリー(1797-1851)母娘もそれぞれ、『女性の権利の擁護』(1789)、『フランケンシュタイン』(1818)において自分たちなりの『楽園の喪失』の再解釈に取り組んだ。〔この問題に関しては、1995年10月、同志社女子大学に於いて行われた、日本ミルトン・センター第20回大会シンポジウム「女性の読むミルトン」における野呂の発表「メアリ・シェリーの『楽園の喪失』の脱構築——『フランケンシュタイン』と同等の配偶者」で論じられている。〕

これらの作品はすべて、ある意味では『楽園の喪失』のヴァージョン(異譚)、もしくは『楽園の喪失』の脱構築であるということが出来る。実際、シェイクスピア(1564-1616)と並び称されるミルトンであるが、実はミルトンの『楽園の喪失』それ自体が、ギリシア・ローマの古典作品およびその他の先行作品をキリスト教的視点から脱構築した、その集大成であるという見方も成立するであろう。そしてミルトンの凄さの一つは、彼の作品が絶えず作家たる読者を突き動かし、脱構築された、彼/彼女自身のく楽園喪失の物語を語る作業・かたりなおしの作業へと向かわせるところにあるのではないだろうか。そして、『楽園の喪失』の脱構築作業とは、とりもなおさず、く楽園回復の作業に他ならないのである。

あらためて児童文学の分野に目を向ければ、さきの『ナルニア国年代記』のほか、F.H. バーネット(1849-1924)の『秘密の花園』〔原題 *The Secret Garden*〕(1911)、フィリップ・ピアス(1920-)『トムは真夜中の庭で』〔原題 *Tom at the Midnight Garden*〕等においては明らかにく失われた楽園を回復させようという、言わばく楽園回復の意図が窺われるのである。また、ルイス・キャロル(1832-98)の『不思議の国のアリス』(1865)ではトランプの国の庭は、ある意味では原-楽園のカリカチュアとして提示されている。

本論では、『秘密の花園』を取り上げて作品中に描かれた庭とその意味について考察する。その作業は必然的に『楽園の喪失』との相互-テキスト性を論じる作業とならざるを得ない。

1. 『楽園の喪失』の解体とく楽園回復への指向

作品の冒頭で主人公メアリーは母親に顧みられない子どもとして提示される。父親は忙しく病弱で、母親は彼女を乳母まかせにしてできるだけ「自分の目にふれさせない」ようにして育てさせたのである。保護者が被保護者を「見ない」ということは、すなわち「愛情をかけない」ということを象徴している。英国昔話「ぼろぎれ娘」を思わせる話の始まり方である。〔詳細は『東京成徳短期大学紀要』第13号(1980年4月)掲載拙論、野呂有子、「英国昔話『ぼろぎれ娘』に関する覚え書』を参照されたい。〕やがて、彼女を

野呂有子『『秘密の花園』におけるミルトンの主題—「へそ曲がりのスコットランド女王から「第二のイヴ」へ—』『東京成徳短期大学紀要』第30号(1997)45-54.

忍耐強く養育していた、たった一人の人物であった乳母を、コレラは容赦なく奪っていく。さらに、名ばかりではあったが母親と父親もコレラにより倒れる。メアリーは完全にみんなに置き忘れられ一人部屋にとり残される。その時敷物の下から一匹の蛇が現れる。

She heard something rustling on the matting, and when she looked down she saw a little snake gliding along and watching her with eyes like jewels. She was not frightened, because he was a harmless little thing who would not hurt her, and he seemed in a hurry to get out of the room. He slipped under the door as she watched. (11)¹

メアリーは何か敷物の上をさらさらと這っている音を聞いた。そして見下ろすと、一匹の小蛇がすべるように這いながら宝石のような目で彼女を見つめているのだった。彼女は驚きはしなかった。というのは彼(=蛇)は無害な小さな生き物で彼女を傷つけることはないだろうから。そして、彼は部屋から出て行こうと急いでいるようだった。メアリーが見ていると彼はドアの下にすべりこんでいった。(下線、日本語訳はともに野呂による。以下同様。)

ついに母親と「見つめ合う」ことのなかったメアリーはここで「蛇」と「見つめ合って」いる。しかもここでは「蛇」は 'it' ではなく 'he' と人称代名詞で言及されている。この部分が描出話法であることから、メアリーにとっての蛇の位置づけが明らかである。彼女は蛇を自分と同等の存在としてみなしているのである。ここでは『楽園の喪失』で「蛇」が担われていた意味づけはまったく解除されている。「蛇」が少「女」を騙すことはない。それを少女は知っている。したがって両者の間には「敵意」も置かれぬ。それどころか、両者の間には(少なくともメアリーの側から見れば)、束の間「見つめ合う」ことによって、一種の愛情にも似た連帯感が生まれている。なぜなら、このバンガローで生きているものといえば、メアリーと蛇しかいなかったからである。

第1章における蛇の登場は筋の展開とはまったく関連がない。それゆえ、子ども向けに短く書き直された日本語版の『秘密の花園』での幾つかに目を通してみると、いずれの版においてもこのシーンは省略されている。作者バーネットは明らかに象徴的な意図をもってこのシーンを導入したのである。すなわち、『秘密の花園』では物語の冒頭では、状況は極めて悲惨ながらも、創世記および『楽園の喪失』において、神が蛇と女との間に置いた「憎しみ」は取り除かれているのである。「蛇」が「女」を騙したことから、人類の墮落すなわち「楽園喪失」が始まったことを想起する時、『秘密の花園』が冒頭から、〈楽園回復〉を指向した作品として自らを定義していることが明らかとなるのである。

2. 「へそ曲がりのメアリー嬢」と庭

『秘密の花園』の作者バーネットは幼年時代を回顧して1892年に次のように書いた。²

The Back Garden was always full of beautiful wonders. Was it always Spring or summer there in that enchanted Garden which, out of a whole world, has remained throughout a lifetime the Garden of Eden?

裏庭はいつも美しい奇跡に満ちていました。いつもあの魔法の庭は春か夏だったのではないのでしょうか。それは、世界全体から切り離されて、今までずっと、エデンの庭 そのものであり続けているのです。

¹ テキストは、Frances Hodgson Burnett, *The Secret Garden* (1911 rpt. 1983, Puffin Books) を使用。以後、引用文の後の括弧内の数字はこの版のページ数を示すものとする。

² Humphrey Carpenter and Mari Prichard, *The Oxford Companion to Children's Literature* (Oxford University Press, 1984) の F. H. Burnett の項。

野呂有子『『秘密の花園』におけるミルトンの主題—「へそ曲がりのスコットランド女王から「第二のイヴ」へ—』『東京成徳短期大学紀要』第30号(1997)45-54.

バーネットが生涯、庭を愛したことは良く知られているが、幼いバーネットが幼年期を過ごしたマンチェスターの家の裏庭は、彼女にとっては一生涯、「魔法の庭」であり「エデンの庭」であった。なお、『楽園の喪失』の「楽園」が「エデンの庭」であることはいうまでもない。やがて、彼女は父の事業の失敗により、この庭から「アダムとイヴのように」追放されることになる。しかし、この庭は彼女の心の中に生き続けていた。これはアダムとイヴが「内なる楽園」を胸に抱きつつエデンの庭を後にしたことと奇妙にも重なるのである。彼女はいつかく失われた楽園をなんらかの形で回復させたいという希望を胸に秘め、その後の人生を生きていった。そしてそれが最終的には『秘密の花園』という作品に於いて結実したのである。

古くからイギリスの子どもたちみんなに愛され、歌いつがれてきたのがいわゆる「マザーグース驚鳥母さん」の歌である。「裏庭」という「魔法の庭」で「マザーグース」の歌を歌いながら育ったであろうバーネットにとって「庭」と関連して忘れられない「マザーグース」の歌が一つあった。それは、「へそ曲がりのメアリー嬢」という歌であった。

Mistress Mary quite contrary,
How does your garden grow?
With silver bells and cockle shells
And marigolds all in a row.
おへそまがりのメアリー嬢
お庭はさぞかしきれいでしょう
シルバーベルズ銀の鈴草といたら草
金盞花も整然と

〔英語本文は Puffin Books 版の the Secret Garden(1911 rpt.1983)によった。なお他のわらべ歌同様、この歌にも多くのヴァージョンがあることは周知のとおりである。〕

このわらべ歌は、物語の第2章で巧みに導入され、主人公メアリーとその性格、そして庭との関わりを規定する一つのパラダイムとなっている。インドで両親を亡くしたメアリーは、ヨークシャーの叔父の家に引き取られる前に、イギリス人の牧師の家に一時とめおかれる。メアリーは木の下で小さな家を造っている。すると牧師の子どもが遊びに加わろうとするが、メアリーはこれを拒否する。彼女は母親に愛されずに育ったために、他人との関わりを持ち方を知らないのである。そしてこれが理由で「おへそ曲がりのメアリー嬢」と子どもたちから歌で嘲されたことになる。この歌のテーマが庭造りであること、そしてメアリーという名とその性格が符合することから、メアリーは、子どもたちにとっては恰好の「いじめ」の対象となったのである。そして牧師の子どもたちは、メアリーが牧師の家に滞在している間中、彼女を「おへそ曲がりのメアリー嬢」と呼んでからかうのであった。

3. 「へそ曲がりのメアリー嬢」から「第二のイヴ」へ

このわらべ歌は、第9章で再び言及される。メアリーは召使のマーサの弟ディコンを「秘密の花園」に案内する。そこで草花の「種 = the seeds」の話から、「鈴^{ベル}」の形の花へと話題が広がり、メアリーは「へそ曲がりのメアリー嬢」と自分が呼ばれていたことを話し、このわらべ歌をディコンに歌って聞かせるのである。それに対してディコンは次のように答える。

There doesn't seem to be no need for no one to be contrary when there's flowers
an' such like, an' such lots o' friendly wild things runnin' about makin' homes for
them-selves, or buildin' nests an' singin' an' whistling, does there?(96)
んだ、こんなに花があって、仲良しの野のけものや鳥たちが走り回ったり、巣造りをしたり、歌ったりささやき交わしている時には、なにもへそ曲がりになることはないべー。

ディコンの言葉を直截に言い換えれば、人がへそ曲がりになるのは、その人物を取り巻く環境にも大いに関係があるということになる。周りの環境が悪ければ人は「へそ曲がり」にもなるのである。さらにいえば、他

人を「へそ曲がり」と囃したてる人物にこそ問題があるともいえよう。

重要なことは、ディコンの言葉が指し示す通り、このミセルウェイトという小宇宙のさらに一部をなす「花園＝楽園」は、この時点ですでに回復された状態にあるということである。『楽園の喪失』において墮落以前のアダムとイヴが住んでいた「エデンの園」では人間とけものたちは意思疎通ができ、けものたち同士の殺戮も存在しなかったのである。人間のけものたちの意思疎通が不可能になったのも、けもの同士が殺戮し合うようになったのも、すべて「人間の神に対する不従順」が原因であった。それで人間同士も憎み合うようになったのである。

ディコンの言葉を聞いて、種をもってディコンのわきにひざまづいていた(kneeling by him holding the seeds)メアリーは顔をしかめるのを止めて、ディコンに言う。

You are as nice as Martha said you were. I like you, and you make the fifth person. I never thought I should like five people.(96)

あなたはマーサが言っていた通りのすてきなひとね。わたしあなたが好きよ、あなたはわたしが好きになった五番目の人なの。わたし五人もの人を好きになるなんて思ってもいなかった。

すでに指摘したように、メアリーは母親に疎まれ、インド人の乳母によって養育された。しかし、乳母とメアリーの間には真の意味での心の通い合いはあったのだろうか。答えは否である。侵略者であるイギリス人の政府高官の娘に、植民地の原住民がいわば「奴隷」として使えていたというのが、メアリーと乳母の関係を示すのに最もふさわしい説明であろう。そこでメアリーは一種の「女王」だったのである。「女王」と「奴隷」との間には上下関係はあっても、真の意味での人間関係は生まれようがない。なぜなら、真の心の交流とは、互いに自由で平等な個人同士の関係において見いだされるものだからである。メアリーはヨークシャーで人を五人好きになった。それはディコン、ディコンの母、マーサ、そして庭番のベン・ウェザースタッフに駒鳥(！)である。この5人とはメアリーは真の心の交流が持てる、あるいは持てたと感じたのである。そして、メアリーがディコンにメアリーが好きかと尋ねると、「ディコンも好きだし、駒鳥も好きだと思う」という答えが返ってくる。メアリーはディコンに受け入れられ、駒鳥に受け入れられ、花園にも受け入れられた。もはや彼女は「へそ曲がりのメアリー嬢」ではなくなったのである。

ちなみに「女王」といえば、このわらべ歌の中の「へそ曲がりのメアリー嬢」とは「スコットランド女王メアリー」を指すとする説が有名である。彼女は悲劇の女王であり、彼女の身の回りの人々は次々と命を落とし、最後には彼女自身が幽閉され、処刑されることとなる。それゆえ、「へそ曲がりのメアリー嬢」とは、単に庭遊びの好きな「へそ曲がりの女の子」を意味するだけではなく、身の回りの人々が次々と命を落とし、最後には自分も不遇のうちに死を迎えるという不吉な暗示をも担うあだ名なのである。現にメアリー少女の身の回りの人々は次々とコレラで命を落としたのであった。

しかし、秘密の花園の中でディコンや駒鳥に受け入れられることによって、メアリーは完全に「呪い」から解放されたのである。この後の彼女は、次々と周りの人を幸福にしていく。コリンを「呪い」から解放し、そして彼の父親をも「呪い」から解放し、ミセルスウェイトという小宇宙の秩序を回復するのである。彼女は「第二のイヴ」と呼ばれる「聖母マリア」(英語読みではメアリー)がキリストを産み出す「母親」になることによって神の世界救済の御業に連なったように、「顧みられなかった花園」のいわば「母親」として、「花園」を養育するうちに、ミセルスウェイトという小宇宙を救済する神の御業の連なるのである。

ここでとくに創世記及び『楽園の喪失』との関連で指摘しておかなければならないことが三つある。それは、「出産の呪い」、「女の末裔」そして「ばらの花」の意味するところである。創世記及び『楽園の喪失』においては周知のように、神の命令に背き禁断の木の実を食べたイヴには罰が与えられる。それは、「苦みのうちに子を産む」という罰である。そしてそれとバランスを取るかのように神は人類救済の展望を「女の末裔＝the woman's seed」という神秘の言葉に託して人類に与える。「女の末裔＝the woman's seed」とは、神との信頼関係に立つ義の人々の系譜を指し、それはやがて神の子キリストに繋がる。そしてキリスト教においては「ばら」はキリストの象徴となり、とくに「赤いばら」は「人類救済のために自分を贖いとして、血

を流したキリストの受難」を象徴するのである。ちなみにダンテの『神曲』の最後では、ばらとユリの花が円舞を踊る天国の場面で大団円を迎えることが知られている。

ミセルスウェイトのこの花園の中でかつて悲劇が起きた。コリンの母親はコリンを身籠り、この花園のお気に入りの木の枝に座しているとき、突然その枝が折れて地面に投げ出され、その日のうちにコリンを早産して、自分はカつき死んでしまうのである。彼女は「苦しみの内に子を産み」死んだのであった。いかに気高く心やさしい女性であっても、人類の母イヴが犯した罪の罰から逃れることはできなかったのである。このためにコリンの父親は「四方を塙で囲まれた庭」の扉に鍵をかけ、人類の始祖の物語においてエデンの園が封印されてしまったように、花園を封印してしまったのである。しかし、そこには故人が愛したばらが植えられていた。コリンの母親から、ばら造りの手ほどきを受けたベン・ウェザースタッフは実は密かにばらの手入れをしていたのだが、メアリーもこの「閉ざされた庭」の話聞いてまず気にかけてのは中に植えられていたばらのことであった。つぎに、彼女が気にするのは花の「種＝the seeds」である。

神の不思議な配剤により、ばらと花園は「第一のイヴ」リアスから「第二のイヴ」メアリーの手に託される。花園に「種＝the seeds」を植え、「母親」のように「キリストの象徴」たるばらの世話をするメアリーはこの意味でも「第二のイヴ」の資格を十分に備えているのである。彼女はやがて、花園と同じようにうち捨てられていたコリンを発見し、いささか乱暴なやり方ではあるが、彼を教育し、ベッドに寝たまの「赤ん坊」のようなコリンを「自分の二本の足で歩く」ところまで育てあげるのである。不吉な「スコットランド女王メアリー」は、花園とディコンを仲介として「第二のイヴたる聖母マリア」へと生まれ変わるのである。

この意味で『秘密の花園』第9章は全27章の内でも極めて重要な章の一つである、この章において「種＝the seeds」の語が頻出することも忘れてはならない。この「種＝the seeds」とはメアリーが花園に植える種であると同時にミセルスウェイトという小宇宙に芽生える、善を指向する出来事の種でもあり、これが「メアリーの種＝Mary's seeds」であることから、『楽園の喪失』第10巻、11巻、12巻に響き渡る、救済を約束する神の言葉「女の末裔＝the woman's seeds」に響き合うものなのである。

4. 「堅く立つ」——永遠のとき時間への通行手形

かつて筆者はミルトン作『楽園の喪失』、C. S. ルイス作『ナルニア国年代記』、T. S. エリオット作『四つの四重奏』を結ぶキーワードが「堅く立つ＝stand still」であること、そしてこの姿勢が絶対者に対する人間の有るべき姿を象徴することを明らかにした。(『東京成徳短期大学紀要』第29号『ナルニア国年代記』におけるミルトンの主題)実は、この言葉は『秘密の花園』においてもキーワードとして重要な機能を果たしているのである。それは、メアリーが花園の入り口を見つけ出す過程において注意深く使用されている言葉なのである。

第8章で、駒鳥を仲介として偶然、土の中から花園の鍵を見つけたメアリーは「立ち上がり＝stood up (61)」、手にした鍵を「見つめ」この鍵が「10年間、土の中に埋まっていたのだわ」とそっと呟くのである。花園の鍵もまた、メアリー同様、10年間だれからも顧みられずにいたが、地面をつつく駒鳥の働きかけに応じるかのように、土の中からいわば、顔を覗かせメアリーに発見される。この時、メアリーがとった姿勢が「立ち上がる」と表現されていることはきわめて興味深い。なぜなら庭に入るという行為は、たとえく家父長によって禁じられた行為ではあっても、実は神の御心に適った行為であったことが後に明らかになるからである。

メアリーの庭への回帰は、漸層的かつ着実に進められて行く。第九章においては、縄跳びをするメアリーの「風を切る」行為が、奇跡を起こしたかのように、一陣の風により、花園の入り口が指示される。メアリーはポケットから取り出した鍵でその戸をあける。そしていまや、「彼女は秘密の庭の内側に立っていた＝She was standing inside the garden.(69)」のである。

さらに第13章において今度はメアリーは「母を亡くし、10年間、父親から顧みられずにいた」コリンを「発見する」が、この章におけるメアリーの行動が「秘密の庭」を発見したとき、殆ど同じ表現で語られていることは重要である。

She pushed it open very gently and closed it behind her, and she stood in the corridor ... It [the crying] was on the other side of the wall ... so she walked to

the door and pushed it open, and there she was standing in the room!(111)

彼女はドアをそっと押し、後ろ手で閉めた。すると彼女は廊下に立っていた。鳴き声は壁の反対側から聞こえていた。そこで彼女はドアのところへ行くとそれを押して開いた。そしてほら、彼女は部屋の中に立っていた。

メアリーはとうとう泣き声の主の部屋を突き止めた。そして秘密の庭の中に入っていったのと同じように、その部屋の中へ入っていった。彼女の行為が神の御心に適ったものであることは「立つ」の語が使われていることから明らかである。

ちなみに、メアリーと出会ったコリンは彼女を「穴のあくほどにじっと見つめた=stand and stared and stared(112)」のであった。すでに指摘したように、「見つめる」という行為はこの作品においてはきわめて重要な意味を持っている。メアリーの母親はメアリーを「見よう／愛そう」とはしなかった。そしてコリンの父親もコリンを「見よう／愛そう」とはしなかったのである。ここでコリンがメアリーを「見つめた」ということは、二人の子どもの間に人間的交流が生じたことを象徴するのである。さらに、卵から孵ったばかりのひよこが最初に目にしたものを母親として認識し、その後をどこへでもついていくという現象や、赤ん坊が母乳を与える母親の顔を「じっと見つめて」母親として識別し、人間関係の第一歩を踏み出すことを考慮すると、このシーンでコリンがメアリーを「見つめる」ことの重要性がいっそう明瞭になる。メアリーは、コリンが対等で自由な人間関係を構築しようとする際に、最初に遭遇した相手なのである。それ以前に出会った人々は、コリンという我が儘な暴君にとっては、単なる奴隷に過ぎない。奇妙なことにインドでのメアリーもまったく同じ状態にあったわけで、二人の境遇は極めて良く似ているのである。

さて、「堅く立つ」ことに話を戻せば、第21章冒頭は、永遠の時間に連なる瞬間を描写する極めて美しい文章で始まるが、そこで‘stand,’ 及び‘still(-ness)’の語が使用されている。いささか長くなるがここに主要部分を引用する。

One of the strange things about living in the world is that it is only now and then one is quite sure one is going to live for ever and ever and ever. One knows it sometimes when one gets up at the tender, solemn dawn-time and goes out stands alone and throws one's head far back and looks up and watch the pale sky slowly changing and flushing and marvellous unknown things happening until the East almost makes one cry and one's heart stands still at the strange, unchanging majesty of the rising of the sun-which has been happening every morning for thousands and thou-sands and thousands years. One knows it then for a moment or so. And one knows it sometimes slanting through and under the branches seems to be saying slowly again something one cannot quit hear, however much one tries.(182)

この世に生きることの不思議さの一つは、自分は永遠に生きるのだと本気で信じるようになることがほんの間々あるということである。やさしく荘嚴の夜明けに目覚め、外に出て、一人で立ち頭をぐっとそらせて空を高く高く見上げ、蒼い空がゆっくりと変化しながら赤らんできて、不可思議な道の出来事が起こるのをじっと眺めていると、ついには東の空[の美しさ]に泣けてきてしまう。そして心は、何千年も何千年もの間、毎朝ずっと行われてきた日の出の、奇妙で不変の威嚴を前にしてひそやかに立ちつくすのである。その時、人はほんの東の間、この気持ちを味わう。そして時には人は日没に一人だけでも森の中に立つと、木々の間からさしこむ神秘的な深い黄金色の静けさがいくら耳を澄ませてもはっきりと聞き取れない何事かをゆっくりと、何度もささやきかけているような気持ちになるのである。

人は「ひそやかに立ちつくす=stand still」とき、永遠の時間、永遠の命にあずかると感じる。そして神秘的音楽に耳を澄ます。‘stand still’とは人が神との信頼関係に立ち、永遠の命にあずかると感じる時に取る姿勢なのである。そして、神とメアリーとの仲介者ともいえるディコンも作業の手を止めて、「驚きの色を目に浮かべつつ、堅く立った=stood still(183)」。彼は、まるで「汚れのない天上の髪の毛の御心から生まれて

野呂有子『『秘密の花園』におけるミルトンの主題—「へそ曲がりのスコットランド女王から「第二のイヴ」へ—』『東京成徳短期大学紀要』第30号(1997)45-54.

来たかのごとき、すばらしい春の日の午後」に感動の色を隠しきれないのであった。

やがて「奇跡」が起きる。ベン・ウェザースタッフの言葉に怒りを覚えたコリンが、ミセルスウェイトの跡取りとしての威厳を示そうと自分自身の足で「立ち上がった」のである。

Colin was standing upright—upright—as straight as an arrow and looking strangely tall his head thrown back and his strange eyes flashing lightning.(191)

コリンはまっすぐに立った。まっすぐに。矢のようにまっすぐに、そして奇妙にすらりとしていた。彼の頭は天を仰ぎ、奇妙な目は光り輝いていた。

母の死と引き換えに生まれ、父に疎まれ、10歳になるまでベッドから自力で出たこともなかった、赤ん坊のようなコリンが自分の足で直立したのである。彼はいまや完全に神との関係を回復し、人としてあるべき姿へと変容を遂げたのである。上記のコリンの姿の描写は、われわれに『楽園の喪失』第7巻507-509行の、創造されたばかりの(すなわち、墮落以前の)アダムの描写を思い起こさせる。

but endured
With sanctity of reason, might erect
His stature, and upright with front serene
汚れなき理性をさずけられ、すくと立ち
しづかなるひたいをまっすぐにもちあげて、

寝たきりであった、ミセルスウェイトの後継者コリンが自分の足で直立したことは、ミセルスウェイトという小宇宙における、いわば「楽園回復」の成就を象徴する。なぜなら、コリンは「墮落以前のアダム」の描写に重ね合わされて描かれているからである。そしてコリンは「どんどんまっすぐに立つ=stood straighter and straighter」ようになり、ベンを真正面から「見据えて」後継者としての権威を証する。続く第22章ではすくと立つコリンの描写が繰り返され最後の行は「コリンは本当に自分の2本の足で立っていた。しかも笑いながら」という文で終わっている。彼は永遠の時間への通行手形を、すなわち「神との関係の回復を庭の中でしっかりと手にしたのであった。そのことは『秘密の花園』の最終部が以下の文章で締め括られていることから一層明白となる。

Across the lawn came the Master of Misselthwaite, and he looked as many of them never seen him. and by his side, with his head up in the air and his eyes full of laughter, walked as strongly and steadily as any boy in Yorkshire Master Colin!(253)

芝生を横切ってやって来たのはミセルスウェイトのご主人様であったが、今まで多くの召使が見たこともないような〔元気で元気に〕姿だった。そして、そのかたわらには、頭をぐっとそらして、目にはあふれるほどの笑みをたたえて、ヨークシャー中のどんな男の子にも負けないほどたくましく揺るぎない足取りでコリン坊っちゃんまが歩いておいでになった!

「這えば立て、立てば歩めの親心」という言葉があるが、メアリーが見つけた時点では「這う」ことしか恐らくは出来なかったコリンが秘密の庭の中で「立ち」、最後には父親とともに「揺るぎない足取り」でミセルスウェイトの館に「歩いて」帰還した。その姿はたくましく、ミセルスウェイトの後継者としてまったく申し分のないものであった。

5. 「庭の中」——救済の場

すでに述べたように「庭の中に入る」ことは神の御心に適う行為であった。そこでは万物が健やかに育ち、子どもたちは庭いじりを通して「楽しみながら働く」(78)ことを学ぶ。ここでも創世記における罰としての「労働の呪い」は解かれている。

コリンの父親、ミセルスウェイトの主人クレイブン氏は十年前の妻の死から立ち直れぬまま、大陸を一人で旅していた。そんな彼が眠りの中でなつかしい声が自分を呼ぶのを聞いた。それは、亡き妻リアスの声であった。彼女の面影を求めて諸国を放浪してきたクレイブン氏に妻は自分が「庭の中」にいると告げる。さらにその後ディコンの母親から来た手紙を読んだ彼は、ミセルスウェイトに、あの庭に帰ることを決心する。そして「庭の中」で自分自身の足で立つ息子コリンと喜びの内に再会する。

夫に呼びかける亡き妻リアスの声は、『ジェイン・エア』においてジェインに呼びかけるロチェスター氏の声に連なり、『楽園の喪失』において悪夢にうなされるイヴに呼びかけるアダムの声を想起させ、最終的には造られたばかりのイヴに呼びかける神の声に収斂する。(ちなみに泣き叫ぶコリンの声は『嵐が丘』において窓の外で泣くキャサリンの声に響き合う。)それは人を覚醒させ、新たな生へといざなうのである。

6. 「マザーグース」の世界から「神賛美」の世界へ

『秘密の花園』は「へそ曲がりのメアリー嬢」というマザーグースの歌を一つのパラダイムとして展開する物語であるが、「庭の中」でメアリーがこの歌の呪縛から解放されたことはすでに述べた。もはや「庭の中」でメアリーが「へそ曲がりのメアリー嬢」といって囃したてられることはない。第26章では、「庭の中」で賛美歌が歌われ、ここが神の祝福を受けた庭であることが再確認される。

あらゆる祝福の湧き出ずる源なる
神をたたえよ、
この下界のすべての生きとし生けるもの、
神をたたえよ、
天にありて神に仕うる御身ら天使たち
神をたたえよ、
父なる神、子なるキリスト、ならびに聖霊をたたえよ。アーメン³

最初はディコンが歌って皆に手本を示し、その後はメアリーとコリン、ディコンとベンも一緒に歌った。そしてそこへディコンの母親が加わり、一同は幸福によしれる。

付け加えておけば、この作品を規定しているマザーグースは「へそ曲がりのメアリー嬢」だけではない。実は『秘密の花園』で多に活躍をする駒鳥は様々なマザーグースの歌に登場し、イギリスの子どもたちにとってはおそらく一番なじみの深い鳥であろう。

さらにこの作品に影響を与えているのは英国昔話であろう。野呂がとくに想起するのは「ぼろぎれ娘」の物語であることはすでに述べた通りである。母親に愛されず、顔を見ることさえ嫌がられた『秘密の花園』の主人公メアリーと、母親が死んで取り残され、頼りと思う祖父からは顔も見て貰えない「ぼろぎれ娘」の主人公とは意外近いところにいるように思われる。そうすると、ぼろぎれ娘を励まし成長させる鷺鳥番の少年と『秘密の花園』のディコンも意外近いところにいるのではないだろうか。ディコンは鷺鳥は勿論、いろいろな動物を引き連れており、メアリーの成長に大いに寄与するのである。そして、ディコンが鷺鳥番の少年に一部重なるとすれば、ディコンの母親は鷺鳥番の母さんとなり、鷺鳥母さんそのものに重なるように野呂には思われる。

『秘密の花園』とは母性と子供時代、マザーグースの世界とフェアリー・テールの世界がキリスト教の神の世界へと収斂していく物語として読むことができる。そして「庭に立つ」とは、神への能動的な姿勢を示す言葉であり、有限の時間内に生きる我々人間が「永遠の時間」、「永遠の生命」に連なる鍵語となるのである。

³ 賛美歌の訳は、龍口直太郎訳『秘密の花園』(新潮社、平成七年)より。